

氏名 乗松 恵美
学位の種類 博士(音楽)
学位記番号 甲第18号
学位授与年月日 平成27年3月23日
論文題目 「ヒロシマ」を題材とする声楽作品によるアウトリーチ活動
学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主査	教授	折江 忠道
副査	教授	小濱 妙美
副査	准教授	北村 敏則
副査	教授	龍村 あや子

<論文審査>

主査	教授	折江 忠道
副査	教授	小濱 妙美
副査	教授	龍村 あや子
外部審査員		原田 宏司

(広島文化学園大学副学長)

論文要旨

本論では、「ヒロシマ」を題材とする声楽作品を中心に、筆者が行っているアウトリーチ活動について論じ、その活動に適すると考えられる4つの作品の分析を行い、アウトリーチ実践を行った。さらにアンケート調査結果分析から、「ヒロシマ」を題材とする音楽作品の普及における今後の課題と、平和活動という視点でのアウトリーチ活動の意義、更にアウトリーチ活動が抱えていると思われる課題について論じた。

論文は全5章から成り、第1章では、英米を発祥とするアウトリーチ活動の歴史と、日本における先行研究及び事業事例、筆者自身のアウトリーチ活動の実践例について述べた。

第2章では、筆者の行うアウトリーチ活動に適していると考えられる「ヒロシマ」を題材とする声楽作品の作品研究を行った。作品選出については、以下の点を基準とした。

- ① 筆者が演奏可能な独唱曲
- ② 楽譜の入手が可能な曲
- ③ 子どもたちを対象にアウトリーチを行うことを考え、過度に残酷な表現を用いた詩を題材とした作品は避ける
- ④ 複数の作曲家により音楽作品化されている、文学作品として優れていると思われる詩を題材とした作品

上記のような条件から、以下の4作品を選出した。

原民喜「永遠のみどり」を題材とした独唱曲

原守夫《永遠のみどり》

助川敏弥《永遠のみどり》

山田数子『慟哭』を題材とした独唱曲

尾上和彦《慟哭》

早川正昭 ソプラノと打楽器とコントラバスのための《祈り》

それぞれの作品について、詩と曲の分析及び解釈を行うことで、作品の特徴を考察した。分析によって得られた作品の特徴を元に、子どもたちを対象とするアウトリーチのプログラム案と、一般向けのコンサートにおけるアウトリーチの手法を用いたプログラムの案を示した。

第3章では、第2章で考案したプログラムの中から、原守夫《永遠のみどり》と尾上和彦《慟哭》を用いたアウトリーチ実践事例の報告と、実施後アンケートから見る対象者の感想を挙げ、事例毎のアウトリーチ演奏の効果について考察した。実践事例は以下の5例である。

	(事業名)	(内容)
(1)	広島県廿日市市立原小学校アウトリーチ	子どもたちを対象とした小学校でのアウトリーチ 筆者の行う歌唱講座受講生を対象としたアウトリーチ アウトリーチの手法を用いたホールコンサート
(2)	広島県呉市立坪内小学校アウトリーチ	
(3)	NHK 文化センター広島歌唱講座	
(4)	はつかいち音楽祭 乗松恵美ソプラノコンサート (広島)	
(5)	乗松恵美ソプラノリサイタル (京都)	

第4章では、第3章で実施した事業で行った実践後アンケートの結果について分析と考察を行った。アンケート調査結果では、プログラム実施前の詩人、詩、曲についての認知度は概ね20%程度と高くなかったものの、プログラム実施後、対象者のほぼ80%が「詩人や他の作品についても知りたい」と答える結果となり、アウトリーチによって「ヒロシマ」を題材とした作品についての関心度を上げることが出来たことがわかった。また、プログラムについての自由記述の感想の多くに「演奏を聞くことで平和について考えるきっかけとなった」という内容の意見が上がり、筆者のアウトリーチ活動の目的の一つである平和活動の一端に寄与することが出来たと考えた。

第5章では、第2～4章の作品研究からアウトリーチ実践、実践後の対象者たちの意見から得られた問題点や課題について以下のように考察した。

- ① 「ヒロシマ」を題材とする音楽作品を普及するためには、単に再演の機会を増やすだけではなく、自発的に演奏会に足を運ぶことの出来ない広範囲の人々、例えば子どもたちに聴かせる場を設けることが重要である。その点において、アウトリーチ演奏は有効な場と成り得る。
- ② 平和活動という視点で見て、作品を解りやすく伝えるというアウトリーチの手法が有効であることはわかったが、全世代（特に戦争体験世代である70代以上の人々）に受け入れられる内容にするには、更なる工夫を必要とする。
- ③ 筆者の理想とするアウトリーチ演奏の機会を増やしていくためには、アウトリーチについて実施先の理解を得ることが重要である。そのためには、アウトリーチの利点を理解して頂く必要がある。

「ヒロシマ」を題材とする音楽作品の普及と平和活動という観点から見て、アウトリーチが一つの有効な方法であることが明らかになったと筆者は考える。加えて、今後の筆者の理想とするアウトリーチの場を増やす、という意味で、音楽アウトリーチという方向だけではなく、教育の場での「平和教育プログラム」の一つの形として提案する方法を模索していきたいとし、結びとした。

審査結果の要旨

＜リサイタル審査＞

今回の博士学位申請リサイタルはアウトリーチによる平和活動の一環として2014年11月7日18:00～19:45にわたり京都賀茂川ルーテル教会において開催された。

そもそもアウトリーチとは普段音楽をはじめ芸術に接する機会の少ない人達の為に演奏会などの活動を通し芸術への理解を深めてもらおうとする試みで、聴衆をして如何に自然な状態で抵抗なく音楽の世界へと招き入れるか、それと同時に如何にして高い水準の演奏内容を保ちつつ提供し続けるかが大きな課題となる。

聴き慣れた童謡やフォークソング、またはポップス、はたまた歌謡曲等々を演奏して聴衆の興味を募り一瞬にして音楽の世界へと招き入れるのは比較的容易な事のように思われる。しかしながら一時間から二時間弱にわたるコンサートにおいて聴衆を飽きさせず尚且つ高い精神性の域にまで誘導するのは中々に難しい試みである事は否めない。

今回のリサイタルは広島出身者でありまた敬虔なるキリスト教信仰者でもある当該申請者の声楽家としての使命感に加え、原爆による悲惨さを軸に平和の尊さを伝える意図をもって開催された。

その音楽水準の高さはもとより聴衆を平安と神聖な感動の高みにまで導いた発想力と実行力は称賛に値するものであった。

リサイタルは下記のプログラムにより行われた。

《第一部、山田耕筰歌曲作品集～こうさく少年のおはなし～》

- ①赤とんぼ
- ②中国地方の子守歌
- ③からたちの花
- ④待ちぼうけ
- ⑤鐘が鳴ります
- ⑥この道

先ずは誰もが知っている「夕やけ小やけの赤とんぼ～」の心和む旋律と歌唱で一瞬の内に聴衆の心を掴んでしまい、更には昔話風に架空の「こうさく少年」を登場させ、各曲があたかも彼の成長に合わせた内容で展開するような筋立てを脚本し、その物語を語りながらの歌唱には普段音楽に慣れ親しむ機会を持たない人はもとより、声楽を生業としている我々さえをも夢中にさせる一種メルヘンのような雰囲気新鮮な感動を与えた。

《第二部、尾上和彦作曲、山田数子の詩による「慟哭」》

この作品は広島への原爆投下により夫と息子を失った詩人山田数子の悲痛な「子を亡くした母の嘆き」の詩に書かれた曲であるが、スライド写真を用いての原爆関連事項説明というショッキングな進行でありながら、単なる悲痛で残酷な表現にとどまらず「母の愛」を説くべく語られ歌われた母親としての愛の深さは、悲しみと共に安らぎさえも感じさせるものであった。

忌むべき事柄を愛の深さにまで昇華させた発想と表現力は見事なものであった。

《第三部、オペラアリア集》

- ①プッチーニ作曲
「ラ・ボエーム」より～私が街を歩くと～

有名なムゼッタのワルツであるが聴衆の中の比較的若い男性に向かったの歌と演技による誘惑攻撃はまさにオペラの中のムゼッタを彷彿とさせるものがあり、男性客も大喜びの態であった。

②プッチーニ作曲「ジャンニ・スキッキ」より～私の大好きなお父さん～

この曲も最近テレビのCMでよく聞かれるようになったアリアで、娘が父親に「好きな人がいるの、どうか結婚を許して下さい」と甘く切なくそして愛らしく奏でる名曲。

客席でコンサートに聴き入っていた当教会の牧師を壇上に誘い父親役を懇願して、何とも愉快的な親娘劇を演じながらの歌唱は聴衆を爆笑の渦に誘った。

このようにして聴衆参加のオペラアリアを披露する事によって、オペラが特別堅苦しい音楽劇ではなく、日常的で親しみやすい総合芸術であるという事実を認識せしめる大切なきっかけになったと信じるに十分な出来映えであった。

③ドニゼッティ作曲「アンナ・ボレーナ」より～私の生まれたあのお城～

このオペラは悪名高きイングランド国王ヘンリー8世の2番目の王妃アン・ブーリン（伊語名：アンナ・ボレーナ）の史実に基づく物語で、夫であるヘンリー8世の命により死刑に処せられてしまうアン王妃にまつわる悲劇。

丁寧な時代背景の説明に始まり当時の政治情勢からヘンリー8世の人となりの解説の後、おもむろに淡々と歌が始まり、教会内の空気が一瞬にしてシーンと静まりかえり聴衆の集中度が肌に伝わる程であった。

このオペラアリア集で歌われた3曲のアリア全てに丁寧な解説と見どころ、聴きどころの通情報が語られ、聴衆にとっては至れり尽くせりの思いやりと愛情に溢れたりサイタルとなった。

演奏水準の高さは全く失われず、常に聴衆視線に立ち、分かりやすく解説表現をし、聴衆を引き付けて止まない申請者の努力と固い信念は必ずや音楽芸術を一般社会の隅々まで浸透させるに足る貴重な活動である事を認め、博士の学位の要件を満たすものとして、主査と副査3人全員の一致により合格とした。

<論文審査>

審査の方法

平成27年2月6日（金）13時より、公開発表会を行った。始めに候補者が45分程度、スライド・音源を用いて論文の内容について述べ、次いで主査、外部審査員を含む3人の副査、および他の出席者による質問に候補者が答える形で、質疑応答が約30分間にわたって行われた。

公開発表会が終了した後、別室で審査員による口頭試問、および予備審査での指摘に基づく修正・加筆等が確認され、候補者退席の後、全員の協議により審査結果を確定した。

審査の内容

本論文は、広島出身の音楽家である候補者がライフワークとして行っている、「ヒロシマ」を題材とする音楽作品によるアウトリーチ活動についての研究である。アウトリーチ活動とは、英語のoutreachに由来し、個人もしくは何らかのグループが、社会福祉事業などにおいて、様々な施設や学校などを訪問し、対象者に合わせて専門分野をわかり易く解説し、一般普及させる活動を意味する。候補者は、広島在住の音楽家として、広島に投下された原爆の悲劇を表現している詩を

題材とする声楽作品を中心に、小・中・高校などの教育の場や公共施設、放送局などで、音楽によるアウトリーチ活動を幅広く行ってきた。そこには、「ヒロシマ」を題材とする優れた声楽作品の発掘・普及を目指しながら、広く人類の恒久平和を願う候補者の直向な姿勢が反映されており、これが今回の論文執筆の大きな契機ともなっている。論文の内容は以下のとおりである。

まず第1章では「アウトリーチ」という活動とは何か、その歴史、基本原則、音楽によるアウトリーチ活動の歴史と実践例について述べている。アウトリーチとしての演奏活動の基本原則は、候補者によると、少ない人数、小さな会場、短い時間により、「参加者が音楽に心を開きやすくする外的な環境」を作ることである。アウトリーチを支援する主な事業としては、財団法人地域創造による「公共ホール音楽活性化事業」、文化庁による「次代を担う子供たちへの芸術家派遣事業」、公益法人およびNPO法人の運営する公共ホール独自の事業、大学等の教育施設による人材育成カリキュラムなどが挙げられる。候補者は、聴衆により深い感動を与えるための重要な手法としてアウトリーチ活動を位置づけ、質の高い演奏と並んで、「音楽の文脈」や「音が持つ記号としての意味」を聴衆と共有することの必要性を強調し、そこに音楽によるアウトリーチ活動の意義を見出している。そのためには対象となる作品の徹底した分析と解釈が前提となる。

第2章では、被爆地「ヒロシマ」の悲劇を題材とする声楽作品の中から、特にアウトリーチ活動の場で歌うのに適すると候補者が考える作品として、原民喜の原爆詩「永遠のみどり」による歌曲と、山田敦子の原爆詩集『慟哭』を題材とする歌曲を取り上げ、作品成立の経緯、詩の解釈と音楽の分析を行っている。『慟哭』に基づく音楽作品については、尾上和彦作曲の歌曲集《慟哭》と、早川正昭作曲の、ソプラノとコントラバスのための《祈り》が取り上げられ、アウトリーチで歌うという観点から詳細な比較考察が行われている。さらに、これらの楽曲をアウトリーチの場で歌う場合に考慮すべき点が具体的に考察され、歌い手としての候補者ならではの、さまざまな状況に即した工夫も検討されている。

第3章では、2014年度に候補者が行ったアウトリーチ活動の具体的な事例について、実施内容の詳細、その事業の形態、学校等で行った際の実施方法等が報告されている。第4章はアンケート調査で、主に作品への興味・関心や、プログラム実施前と実施後の対象者の意識の変化に焦点が当てられている。最後の第5章では、それらのアンケート結果を踏まえた考察が行われているが、それによれば、①アウトリーチ実施後には、「ヒロシマ」を題材とする作品に対する聴衆の関心度が、若い層を中心に飛躍的に向上したこと（戦争世代の反応は概して消極的）、②音楽作品よりも文学作品への関心度がより高かったこと（音楽作品には時間的猶予が必要）、などが明らかにされ、今後の問題点と同時に、音楽によるアウトリーチ活動の有効性が実証されている。

以上、この論文は、広島を題材とする声楽作品の研究のみならず、音楽によるアウトリーチという活動の新たな可能性について、音楽演奏の世界に重要な情報をもたらすものであり、声楽専攻の博士論文としてふさわしいものと考えられるので、審査員全員の一致により、合格とした。